



木簡状木製品

(1)表

(2)

ローマ木簡実見記

東アジアの木簡への関心が高まっている。一方ローマ木簡は、近年触れられることが少なくなった。先日、ポンペイ考古監督局副総監バロー・ネ氏に面会した際、専門を問われ「タブレットだ」と答えたところ、「自分は金石文だ、仲間だ。ローマ木簡を見ていい」と現物観察の機会を与えられた。

今回実見したのは、木板をくぼませてロウを流し込み、ロウに文字を書くもの。一枚一組で用いられ、筆記面を合わせて、ひもでくる。ローマ帝国の全域で発見される、ポピュラーなタイプのローマ木簡である。

当然、ロウは残っていない。文字を刻むとき、ロウを突き抜けて木に傷が付く場合がある。この傷から訛読するという。外側に、内容のメモがインクで書かれることがあり、この文字も読むことができる。バロー・ネ氏によれば、イタリアでも我々の記帳と同様、筆の運びをメモしつつ読むという。

ポンペイ出土「パン屋の夫婦」の絵（夫がパピルスの巻物を持ち、妻が木簡を持つ）にも象徴されるように、ローマも「紙木併用」であった。ローマでの羊皮紙・パピルス・木簡の使い分けの様相も興味深いように思われる。

（馬場 基）